024

After Century

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

Art Campus

あなたは気づいている!!!
小さな想いが集まって…
大歓声になることを…

第6回 日藝賞 始まる…

第6回「日藝賞」の実施について

1 目的	著しく日藝の名声を高め、その業績が社会に貢献し、芸術を志す学生の夢の対象となる人に授与する
2 対象者	日藝に在籍していた人で分野は問わない
3 候補者選出	在学生（学部・大学院）、専任教職員、臨時職員、非常勤講師、芸術学部校友会役員の記名投票により選出
4 投票期間	平成23年11月7日（月）～11月25日（金）
5 投票箱設置場所	① 江古田校舎正門守衛室 ② 江古田校舎南門守衛室 ③ 江古田校舎各学科事務室 ④ 江古田校舎西棟事務局カウンター前 ⑤ 江古田校舎食堂兼学生ホール食券売り場前 ⑥ 所沢校舎正門守衛室 ⑦ 所沢校舎事務局カウンター前
6 受賞者決定	投票によって選出された候補者について、学部長を委員長とした日藝賞選考委員会で最終選考を行い、1名は得票数の多かった者から選出、1名は得票者の中から日藝賞選考委員会にて審議の上選出。平成24年1月下旬に受賞者2名を発表
7 授賞式	平成24年4月8日の入学歓迎式の中で実施
8 記念講演会	受賞者2名は平成24年度中に記念講演会を実施

林真理子さんの記念講演会　平成23年6月13日開催

青山剛昌さんの記念講演会　平成23年6月24日開催

第5回日藝賞の主な得票者は次のとおりです

《第6回日藝賞投票の参考にしてください》

青山剛昌	漫画家
松井龍哉	ロボットデザイナー
森田公一	音楽　作曲家・歌手
よしもとばなな	文芸　作家
蒼井　優	演劇　女優
石田　彰	演劇　声優・俳優
林　真理子	文芸　作家
小野大輔	放送　声優
松崎しげる	文芸　歌手・タレント
小山薫堂	放送　放送作家
富野由悠季	映画　アニメーション監督
大塚寧々	写真　女優
船越英一郎	映画　俳優
中村獅童	演劇　歌舞伎俳優
北代高士	演劇　俳優
君塚良一	放送　脚本家
塚本晋也	美術　映画監督
荒井良二	美術　絵本作家
平間　至	写真　写真家
高城　剛	文芸　映像作家
篠山紀信	写真　写真家
菅　賢治	放送　テレビプロデューサー
森本レオ	放送　俳優・声優
照屋年之（ヨリ）	映画　お笑い芸人
白川義員	写真　写真家
笹野高史	映画　俳優
竹内順子	演劇　声優・ナレーター
おおたうに	放送　イラストレーター
群　ようこ	文芸　作家
浅利香津代	演劇　女優
高橋英樹	演劇　俳優
三浦建太郎	美術　漫画家
大澄賢也	演劇　タレント・ダンサー
本仮屋ユイカ	演劇　女優
小杉十郎太	放送　声優・ナレーター
瀧波ユカリ	写真　漫画家
佐伯泰英	映画　小説家・写真家
入江　悠	映画　映画監督・映像作家

思いを伝える。

音楽を通して思いを伝える。
銅版画を介して思いを伝える。
言葉はいらない。
そこには、言葉より伝わるものがあるから。

大学院博士前期課程 造形芸術専攻 版画コース 2年

青山由貴枝さん

■銅版画に魅せられて

青山が銅版画を始めたのは大学3年の時。もともと絵を描くことが好きで、大学に入学した当初は絵画コースに進むつもりだったが、大学2年の時に銅版画の体験授業を受けてその考えは一変した。「銅という金属から繊細な作品が生まれることに感動しました」。それからは銅版画一筋。制作にのめり込み、日付が変わる時間まで大学の制作室に籠もることもあるという。銅版画は彼女の生活になくてはならないものになった。

大きな作品になると60cm×90cmにもなる銅版画の制作は、根気と体力を要する作業である。銅の板に下絵を写し、ニードルで銅板を削りながら絵を描いていく。その合間に板を硝酸に浸して銅を腐蝕させ、さらに描き、また硝酸に浸す。その作業を幾度も繰り返し、自分の中にあるイメージを少しずつかたちにしていく。「一つの作品を創るのに平均1カ月かかりますが、刷って、紙を持ち上げる時の感覚が忘れられない。どんな作品に仕上がっているか、毎回楽しみです」。

■技術よりも大切なもの

作品創りには技術も必要だが、それ以上にコンセプトが重要だという。では、青山の作品創りにおけるコンセプトは何なのか？ その問いに彼女はこう答えた。「寂しさとか不安、不満など人間の内面に隠れた感情を表現すること。それが私の一貫したコンセプトです」。たとえば『ドレス』という作品は、女の子のイラストと巨大なキノコのイラストを組み合わせることにより、化粧や着飾ることで自らのコンプレックスを覆い隠す女性の心理を表現。また、無表情の人物が並んでいる制作中の版画は、“他人が同じ場所に存在している不思議”を彼女の視点で捉えた作品である。

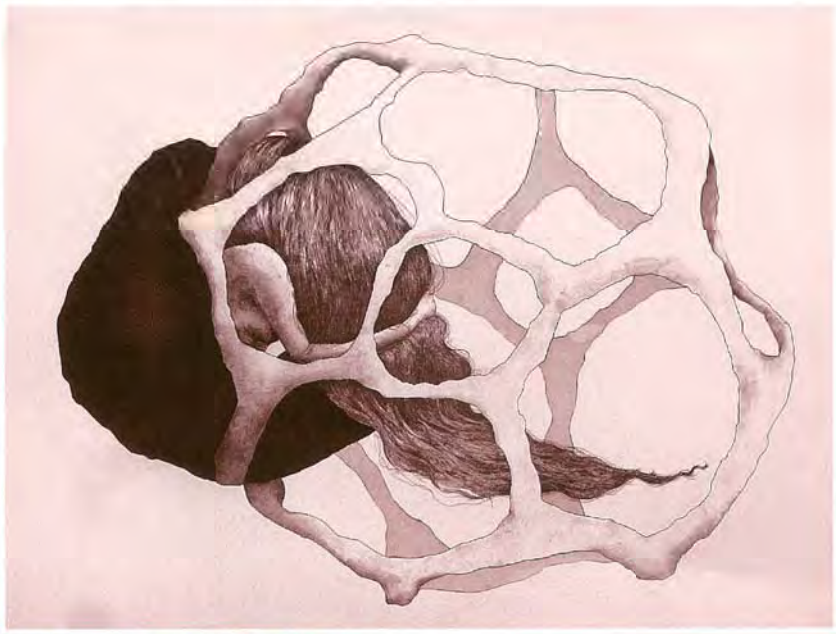
制作中の作品。60×90cm・銅版画（エッチング）

青山が描く独創的な作品は、すべてモノクロ。「人間の内面を表現するのに、色はいらないと思った」と彼女は言う。決してぶれることのないコンセプトを手に入れた青山は、モノクロの世界の中でそれをどう伝えるか、どう伝わるか、日々模索し続けている。

■自分の思いを作品に託す

青山はどちらかというと聞き役。あまり自分のことをさらけ出して話さないタイプである。多くの人は愚痴をこぼしたり、他愛ないおしゃべりをしたりすることで自分の不満や考えを人に伝えるが、青山はそうする代わりに銅版に思いを託す。彼女は一つひとつの作品を通して、「自分」を表現しているのだ。自分を表現するということは、自分と対峙するということ。日々の生活の中で感じる疑問や不安、もやもやした気持ち……。そこから目をそらすことなくまっすぐに向き合い、銅版にカリカリと「自分」を刻んでいるのである。

今年、中国の深圳で開催された第三回ガンラン国際版画ビエンナーレで入選を果たすなど、作品が人の目に触れる機会も多くなってきた。大学の卒業制作で創った作品を銀座のギャラリーで展示した時、年配のコレクターが作品を購入してくれたこともある。もしどこかで彼女の作品に出会ったら、その作品とじっくり向き合って耳を澄ましてほしい。一本一本の線に込められた、青山の静かな思いが聞こえてくるだろう。



「ためいき」（2010年制作）60×90cm・銅版画（エッチング）
2011年春、中国・深圳で開催された第三回ガンラン国際版画ビエンナーレ入選作品。

自分自身と対峙し、人間の内面を描く。

ピアノと向き合い、自分にしか出せない音を。

大学院博士前期課程 音楽芸術専攻 器楽（ピアノ）2年

平田 侑さん

■音楽で人を幸せにしたい

父親はオーケストラで活躍するトロンボーン奏者。現在、自宅でピアノとエレクトーンを教える母親は、オーボエを専攻していた。手を伸ばせば楽器がある。そんな環境で育った平田だったが、幼い頃から親と同じ道には進みたくないと思っていた。5歳からピアノを始めたが興味がもてず、途中で何度も挫折した。しかし高校に入ってから吹奏楽でトロンボーンを担当したり、高校でジャズのビッグバンドに入り人前で演奏したりするうちに、音楽で人を幸せにしたいと考えるようになった。「ただし父と違う楽器で勝負したかったので、トロンボーンではなくピアノを選びました」。

オーディションに合格して大学の定期演奏会でオーケストラと共演し、恩師から贈られたドレスを着てシューマンのピアノコンチェルトを弾いたり、毎年ゴールデンウィークに東京国際フォーラムで開催されるラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭で演奏するなど、大学入学後の平田の活躍ぶりは目を見張るものがある。“蛙の子”にはなりたくなかった平田の身体の中には、音楽を愛し、音楽で生きる両親の血が確かに流れている。

■楽曲の持つイメージを、聴き手に伝える

「先生に恵まれました」。平田は日藝での日々を振り返り、そう言った。ピアノを勉強することを高校在学中に決めてから、ずっと熱心に支えてくれた岡本愛子先生。大学時代に師事していた故・神野明先生。神野先生亡き後に指導を受けた藤原亜美先生。大学院で師事する海老彰子先生。「神野先生は弾く勇気や自信を与えてくれる方でした。2009年の9月に練馬文化センターで神野先生が演奏会をする予定でしたが、病気で弾けなくなり、先生に“司会と演奏を代わりにやってくれ”と言われ、ソロの他にゲストであった声楽家の池田直樹先生の伴奏やトークをやらせていただきました。このようなすばらしい先生方に出会えたことが、今の私の音楽を創る原点になりました」。

入学当初はテクニックを養うことばかりに気を取られていたが、先生たちのサポートを得て演奏の機会を重ねるうちに、自分の中でふくらませた曲のイメージを聴き手に伝えたいと思うようになってきた。その曲の匂いや色。曲が生まれた時代背景やその国の文化。すべてを理解した上で曲を解釈し、イメージをふくらませ、聴き手に伝えるためにどういう身体の使い方をすればいいかを考え、練習する。こうした行為の地道な積み重ねこそが、人を喜ばせる音楽につながると平田は考えている。「神野先生には神野先生の音がある。海老先生には海老先生の音がある。私もいつか自分にしか出せない音を確立したいと思います」。

■何も気にせず、やりたいようにやってこい！

大学院の海外派遣奨学制度に合格した平田は、9月から一年間のフランス留学を控えて多忙な日々を送っている。留学先で彼女が師事するのは、世界各地でソロ、室内楽、オーケストラとの共演など幅広く活躍するピアニスト、ジャン＝マルク・ルイサダ氏。「ルイサダ先生は非常に個性的で、聴こえるか、聴こえないかの弱音のきらっとした音色が魅力的だと思っています。先生がピアノを奏でる姿や音を実際に見て、聴いて、何かを掴んで帰りたいですね」。

日本では勉強の合間にお弟子さんへの指導やアルバイト、さらに友人や先生の伴奏をこなし、忙しく過ごしている彼女にとって、じっくりとピアノに向き合うことのできるフランス留学は貴重な経験になるはずだ。マウスピースをくわえ、毎朝の練習を欠かさない父の姿を見て育った彼女には、よりよい音を出すために努力を惜しまず、前に進む力がある。フランスへの留学は、きっと彼女に何かをもたらしてくれるに違いない。演奏会を前に緊張する平田の背中を押して、勇気を与えてくれた神野先生は、フランスへと旅立つ彼女にこう言うだろう。「何も気にせず、やりたいようにやってこい」と。あの時と同じように。

芸術学部創設90周年記念行事

○舞劇「竹取物語―平成江古田傾奇念仏講―」

日時　平成23年11月22日(火) 18:30開場 19:00開演
場所　江古田校舎中庭

○創設90周年記念植樹

日時　平成23年11月21日(月)
場所　江古田校舎中庭

芸術学部創設90周年記念事業

○中国伝媒大学交流25周年記念講演会 等

日程　平成23年11月21日(月) 14:40–16:10
場所　江古田校舎東棟 EB-2教室

こむけての布石

FIGHTER

90

since 1921

the 90th anniversary Nihon University College of Art

日本大学芸術学部創設90周年

SEISHUNの君たちへ

撮ったあとの誠意

関口寛人 ○写真学科 平成18年卒

写真を撮るとき、気を付けることが一つ。極力、言葉を写さないことだ。言葉は強い。言葉に頼らず、強い写真を撮りたいと思うが、時に言葉の持つ強さに圧倒される。

卒業後、読売新聞社のカメラマンとして働く私は、3月12日未明、東日本大震災の被災地、宮城県石巻市に入った。地獄だった。誰1人欠けることのない家族に出会っただけで、奇跡とさえ思った。

被災地が落ち着きを取り戻し始めた5月初旬、多くの児童が震災の犠牲となった小学校の取材を始めた。何軒もの遺族を訪ね歩き、5歳の男の子と仲良くなった。8歳だった彼の兄は、津波に襲われ亡くなった。兄弟は電車が好きだった。いつも二人で飽きることなく、おもちゃの電車で遊んでいたという。取材の合間や終了後、私は彼と一緒にプラレールで遊び、肩を並べて食事した。

取材が一段落して被災地を離れる前、彼は恥ずかしそうに新幹線の絵が描かれた封筒を渡してくれた。中にはカレンダーの裏側に書かれた手紙が入っていた。お気に入りの新幹線と三脚に立てたカメラ、彼と私の似顔絵が描かれた脇に、こう記してあった。「あそんでくれて　ありがとう」

涙をこらえた。兄を失ったことを理解している中、取材に訪れた私を嫌がることなく、受け入れてくれた。

大学から写真を撮り始めて8年、こんな経験はなかった。自分はこの子に何ができたのか。いまだ答えは出ないが、それでも、彼の手紙は1つの決意を私に与えてくれた。

つらい場面に立ち会いカメラを向けることは多いけれど、撮り続けることに意味がある。「撮るときは技術が大事、撮ったあとは誠意が大事」大学1年の写真基礎演習で教わった言葉が、少しだけ分かった気がする。今後も彼と大いに遊びつつ、彼の成長をファインダー越しに見守っていきたい。

その反面、こんなとき、自堕落に過ごした学生時代の自分が恨めしい。ああ、スタジオ撮影やライティングを、もっとしっかり勉強しておけばよかった。入学式など彼の晴れの舞台を撮るときまでに、もう少し腕を上げておかなければ。

彼の将来の夢は、新幹線の運転手になることだという。いつか、彼が運転する新幹線に乗って、あの日もらった似顔絵のように、共に笑顔で東北を訪れる日が来ると信じたい。

こうした取材活動と写真が、「Yonhap International Press Photo Awards 2011/Single/Gold Prize」を受賞。また、今夏フランスで開催された「VISA POUR L'IMAGE 2011 PEROIGNAN」という世界最大の国際報道写真祭に招待出展されました。

次は皆さんの番だ!

長瀬浩明 ○デザイン学科 准教授

今年は災害や事故など暗いニュースが多い中、女子サッカーの"なでしこジャパン"の活躍は日本を元気づける価値ある出来事であった。彼女たちがサッカーという競技にひたむきに打ち込み、ワールドカップ優勝という偉業を成し遂げた姿に誰もが感動したことであろう。日本の非常事態にたまたまワールドカップの本戦やオリンピックの予選が重なったという偶然はあるにせよ、目に見えない"不安"との戦いを強いられている日本にあって、彼女たちの姿はひときわ輝いていた。ワールドカップの金メダル以上に…

人が感動したり、人を感動させたりする能力を"感性"というが、感性は人と人がモノゴトを共有することによって共感や感動を生む。スポーツを観戦するということは、スポーツを通じて選手とサポーターが勝利への想いを共有しているわけである。"なでしこ"もしかり、サポーターや視聴者はスタジアムで、テレビモニターの前で応援というかたちで参加することによってゲームを共有し、期待どおりかそれ以上の勝利、優勝という快挙を成し遂げた姿に感動した。これにより"なでしこ"の価値が倍増したのだ。

近年はスポーツでトップ選手として活躍している10代から20代前半の選手が目立つ。皆さんと同じ、いわゆるゆとり教育を受けてきた"ゆとり世代"である。ゆとり教育の是非については否定的で既に脱ゆとり教育へと舵が切られている。しかし、ゆとり教育はスポーツや芸術の分野で個性を伸ばすことにも一役かっているという見方もできる。スポーツの分野での活躍ばかりが目立ってはいるが、芸術や創作活動を通じて多くの感動を与えたいものだ。そのためには芸術を志す皆さん一人ひとりの輝きがあってこそ。皆さんはまだ磨かれる前の"原石"かもしれないが、日藝は自分を磨き感性を育んだり個性を伸ばしたりするにはもってこいのフィールドである。ゆとり教育を受けた皆さんの活躍に大いに期待したい。

次は皆さんの番だ。私は皆さんの活躍を支えるサポーターでありたいと願っている。

コンセントを抜いて歩き出そう!

須藤温子 ○外国語 准教授

旅といえば飛行機や列車で名所から名所をひとっ飛び、見どころは外せない、という人も多いだろう。天の邪鬼ではないつもりだが、わたしは目的地と目的地の「あいだ」が好きだ。それも、飛行機や列車よりも、じつはうんと速度をおとして歩く旅が一番記憶に残っている。

室戸岬では台風が追ってきた。道に迷うわたしを、海沿いで雑貨屋を開いていた「おセツさん」はバス停まで連れていってくれた。それどころか、停留所前の名家に頼んで、屋敷奥に人知れず広がる見事な日本庭園まで見せてくれた。そこは昭和天皇が泊まった家だった。

ポーランドのヴィエリチカ岩塩坑からは隣村までバスがでているはずだった。最後の便だ、絶対乗らなければならない。夕暮れのバス停でおばあさんにたずねると、想像を絶したワゴンカーがやってきて「それに乗れ」と(たぶん?)言っている。乗ったはいいが、降りかたがわからなかった。湿った空気の匂いとともに、土地の人の素朴な表情にちらりとのぞく好奇心や、道を急いで荒くなった息づかいがよみがえってくる。

徒歩の旅で不意に遭遇する出来事が忘れがたいのはなぜだろう。それは、歩くテンポと、事物を五感すべてで吸収するテンポがあっているからだろう。視覚偏重の認識のあり方が支配的な今、ヴィキペディアやGoogleマップを頼りにパチパチとキーボードをたたけば一瞬にして知識を集めた気分を味わえる。しかし、一瞬で集めた知識は一瞬で消えるもの。おろそかになりがちなのは、自分の体を動かし、手と肌で触れて感じとり、言葉を交わし、耳をそばだて、空気を吸い込むことだ。でもそれには、日芸の学生のみなさんのほうがわたしよりもずっと長じていることだろう。

五感で吸収したことは、既存の知識や情報をなでて終わることとは別で、表現の糧となっていく。さあ、コンセントを抜いて歩き出そう。借りものの、適当に小気味よい表現が氾濫する時代に、自分の表現を見失ってはいけない。表現者であるみなさんには時代の先駆者よりも反抗者になってほしいというのがわたしの本音だ。…ちょっと挑発しすぎだろうか。

ポケットティッシュの神様

植草 敦 ○就職指導課長

ポケットティッシュを宣伝広告のために街頭や店頭で配布しているのは日本だけのようである。江古田駅前でもパチンコ屋や居酒屋などのポケットティッシュがよく配られている。観察していると面白い。次から次へとティッシュをもらい歩く人、1つだけでは満足せずたくさんもらう人、綺麗な女性からしかもらわない人など。反対に差し出されたティッシュをにらみつけて通り過ぎる人もいる。私はどちらかというと素直にもらうほうである。このような光景を日本に来た外国人はどう思っているのであろうか。お金と資源の無駄であるとか…。しかし、私はこのポケットティッシュに助けられたことがある。

今から5年程前のこと、海外研修でアメリカ東海岸に行ったときの話である。ボストンからニューヨークに移動してマンハッタンのホテルで10日間を過ごすことになった。そんなある日、ロックフェラーセンターの展望デッキに行った。70階から眺めるニューヨークの街並みは実に素晴らしく、あまりの感動にお腹が刺激されてトイレに駆け込んだ。便座が大きくてお尻が落ちそうである。慎重に腰をおろして集中していると近くの個室から壁を叩く音と大声が聞こえてきた。英語はわからないが、どうもトイレットペーパーがなくて嘆いているようである。同情しますがあなたの選んだ個室が悪かった。お気の毒さま。

そんなことを思っていると私もトイレットペーパーを使うときがきた。だが、手を伸ばした先に純白のロールは無かった。しまった! 便座の大きさに気を取られ確認しなかった。上を見ても、後ろを振り向いても、日本ではあるはずの予備のロールがない。オーマイゴット! 神(紙)は私をみはなした。がっかりである。拭かずに出るか、ハンカチで拭くか。さて、どうする。そのとき天からお告げがあった。「捨てる神あれば拾う神あり」だ。いつも持ち歩いているバックの中に手を入れると、奥底にしわくちゃで薄っぺらな「ポケットティッシュの神様」がいた。江古田のパチンコ屋の神様か? ありがたい。2枚で十分である。日本人に生まれて良かった。A型で良かった。個室から出ると先ほどの人と洗面所で出くわした。この人は何で拭いたのか。まさかゴットハンド!?

海外でトイレットペーパーが無くて苦労した話を今でも聞くことが多い。日本のようにきちんとトイレットペーパーが補充される国はまだ少ないようである。それでも恐れることはない。若者よ、ポケットティッシュを持って海外へ行こう。きっといろいろな場面で神様が助けてくれるはず。ウェットティッシュも一緒なら御利益倍増。そして、異文化の刺激を受けながら日本の良さを再発見しよう。旅先での幸運をお祈りします。

写真学科学生、東ティモールで活躍

写真学科の川西悠太（4年）、斎藤優作（3年）、高木美佑（2年）と教授・鈴木孝史が（財）日本国際協力センター（JICE）の"21世紀東アジア青少年大交流計画（JENESYS）東ティモール派遣（若手写真家）プログラム"に応募し、選抜され、8月1日～10日の10日間、東ティモールに行き写真撮影、さらに写真展示をした。日本で同財団および外務省、現地では日本国大使館でブリーフィングを受け、それを念頭に置き、現地を撮影した。その成果を帰国前に東ティモール国大統領宮殿で展示した。東ティモールは21世紀に入って初めての独立国家として認められた国であるが、日本では残念ながら、その前に起きたインドネシアに対する独立闘争の印象が強い。現地は、現在、国連が多方面にわたり援助をしているおかげで、人々は穏やかに生活している。撮影は道路や宿泊施設などのインフラが整備中のため、移動の難しさはあったが、人々は我々に対して大変好意的であったのでスムーズに行うことができた。今回の事業のもう一つの特徴は、現地での展覧会のための写真の出力作業・装丁作業も自分たちで行うことであった。同国には現在、商業的に出力作業をする会社がないために、日本から中型インクジェットプリンターを2台持ち込み、展示作品40点を丸1日かけてプリントした。それと並行して装丁作業を行い、参加者全員（日大・JICE職員・大使館員）で展示作業をした。まさに、日本国あげての手作りの展覧会であった。はっきり言って、日本の力を示す展覧会であった。展覧会のオープニングレセプションにはラモゾルタ大統領、アナ・ペソア検事事務総長、タウル・マタン・ルアク同国軍最高司令官、アミーラ・ハク国連事務総長特別代表、各国大使等多くの各界要人が来館した。

当日はJENESYSプログラムで日本を訪問した沢山の若者たち等多数も駆けつけてくれた。レセプションでは大統領は気さくに学生たちに応対をしてくれ、来館者の方々も熱心に展示作品に見入っていた。結果、とても良い評価を頂いたので、北原大使始め大使館の方々、JICEの方には大変喜ばれた。こちらも日大芸術学部の力を示すことができたと思っている。

写真学科教授　鈴木孝史

江古田スーパーナイト

日藝のチカラ

大学でまさかの本格的なクラブイベントの開催！それも、全国にネットで同時配信！さらに、受験生の多く集まるオープンキャンパスの日にやってしまおう！という大胆不敵な企画こそが「ECODA SUPER NIGHT」だ。実際のクラブ以上に豪華な照明や映像効果、そして、DJやVJのノリの良さに加え、ショーケースでは、演劇学科日舞コース出身で、現在多くのクラブイベントで活躍中の「SaRaMiNa」の二人と、卒業生と現役生、さらに日舞と洋舞のコラボレーションによるユニット「パッパラピ＋Taki」のパフォーマンスが、まさに圧巻の迫力で会場を熱狂させた。大成功に終わった今回の企画。が、実はその目的は、クラブイベントを単に開催することではなかった。ましてや、今回のような企画内容を実践している授業があるわけでもない。むしろ芸術学部8学科の中に、これを推奨しているところなどないだろう。しかし、このイベントには重要な意味が込められていた。それは、今までの各芸術分野にあった固定概念を打破し、変幻自在に変身できる柔軟な思考から創造される「アートのチカラ」、まさに「日藝」とここに集う者にしかできない破天荒なパワーを内外にアピールすることだったのである。参加した学生たちは目を輝かせ、卒業生は故郷にでも帰ってきたかのようにのびのびとし、学生も教職員もその垣根を越えて一丸となって一つの目的を達成することができる大学。そんな芸術系大学が他に存在するだろうか。確かになぜクラブイベントなのか？という疑問を持つ人も多いだろう。しかし、その答えは一つしかない。

「クラブイベントもデキル！でも、それ以外でもモットデキル!!」

この柔軟な思考とそこに生まれるクオリティーの高さこそ、「日藝」の魅力であるし、これからの時代には絶対必要な思考ではないだろうか。

演劇学科准教授　小林直弥

江古田スーパーナイトのコンセプト

クラブというと一般的には「悪」というイメージがあり、その悪とは快楽とされている。しかしながらパスカルやカントは、「理性は快楽から作りだされる」と述べている。人間は快楽を求めて生き、快楽が欲望という生命力を生む。そしてその欲望が理性により、希望や夢へと昇華されていく。人間はそれを実現するために努力をし、その実現が英知や文化という新たな快楽へとつながっていく。江古田スーパーナイトは人間の本質を教え、アートとして新たな夢を生み出す、そんなクラブである。

音楽学科准教授　川上央

写真学科

◉写真甲子園2011・東川フォトフェスタ バックアップ

「写真の町」北海道東川町で開催された写真甲子園本戦バックアップ、及び東川フォトフェスタ(7月26日～31日)でのレビュアー講師、思い出写真館「Niji」への協力・バックアップを専任教員が行いました。

◉JENESYSプログラム(東ティモール派遣)での写真展開催

鈴木孝史教授と学生3名がJENESYSプログラムによる東ティモールを訪問、写真制作活動・写真展を大統領宮殿にて開催、写真展にはラモゾルタ大統領、各国大使が出席されました。派遣期間8月4日～10日 《関連記事表3参照》
在日東ティモール大使館HP
http://www.timor-leste.emb-japan.go.jp/pr38.html

◉夏季ワークショップ・研修会・写真教室各種を開催しました。

○第11回「高校生のためのワークショップ」江古田校舎
7月23日・24日(茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨各都県の高等学校文化連盟後援)
○埼玉県高等学校文化連盟写真専門部 技術講習会
所沢校舎 8月8日
○茨城県高等学校文化連盟写真部会 撮影研修会
(高校生約350名参加) 笠間芸術の森公園 8月9日
大規模撮影会指導のため写真学科専任教員・助手が10名参加しました。
○茨城県高等学校文化連盟写真部会 指導者研修会議
WS講師 江古田校舎 8月20日・21日
○埼玉県立芸術総合高等学校 学外学修 8月22日～25日
○読売新聞写真教室(小学生からの参加)を開催いたしました。
江古田校舎 8月27日・28日

茨城県高文連撮影研修会

◉2012東レ水着キャンペーン 産学連携制作撮影が始動

産学連携プロジェクトとして、2010年から引き続き本年度も写真学科学生カメラマンが東レ水着キャンペーンのモデル撮影を実施。11月上旬記者発表・Web掲載されます。

◉「ミヒャエル・モーザー」オリジナルプリント展開催

「THE FAR EAST―極東の島国より―我が国新聞写真の起源」が11月11日まで江古田校舎西棟芸術資料館において開催中。現代の報道写真の始まりでもある貴重な写真コレクション展です。

Michael Moser, Niphon Bashi, Yedo, c.1871

◉平成22年度卒業制作作品展開催中

12月まで、江古田校舎東棟写真ギャラリーにて順次展示中です。

◉「日本大学芸術学部写真学科2012卒展」・「選抜展」を開催します。

平成24年2月17日～3月3日まで、平成22年度卒業生による作品展が江古田校舎西棟芸術資料館にて開催されます。また、選抜展も2月23日～28日までポートレートギャラリー(四ッ谷)で併せて開催されます。

映画学科

◉社団法人映像文化製作者連盟主催「映文連アワード2011」にて各賞受賞

優秀作品賞(準グランプリ)を『ボーダー』(平成22年度卒業制作／監督：鈴木 祥)が受賞しました。
また、パーソナルコミュニケーション部門 部門優秀賞を『偶像讃歌』(平成22年度卒業制作／監督：和田 彩)、『骨の記憶～沖縄 土の中より～』(平成22年度卒業制作／撮影：鈴木 聡)が、それぞれ受賞しました。

◉「フォーカスイン」開催

平成22年度の卒業制作「映画演出Ⅲ、技術Ⅲ」の作品発表会「フォーカスイン」が、6月26日から7月3日まで"「ガッツリ届けたい」届けなきゃ、届かなきゃ、映画やってる意味がない"をテーマに江古田校舎東棟EB-2教室で開催されました。7日間で延べ741人の来場者が訪れ好評でした。

◉非常勤講師・内藤 誠監督の25年ぶりの最新作映画が完成

東映映画「不良番長」シリーズ「夜遊び帝王」シリーズ等を生み出した内藤 誠監督が、「スタア」以来、実に25年ぶりにカムバック作として完成させた新作「明日泣く」が、今秋全国順次公開する運びとなりました。

美術学科

◉柳瀬荘アート・教育プロジェクト

I期：10月6日～30日 II期：11月3日～27日
10:00～16:30 木～日のみ開催
アーティストトーク
10月30日、11月27日 14:00～16:00

◉北野生涯教育振興会受賞者展

11月14日～25日 9:30～
芸術学部江古田校舎・芸術資料館他

◉正親優哉彫刻展

11月15日～20日 12:00～19:00
ギャラリー kingyo(千代田線根津駅・千駄木駅から徒歩7分)
http://www.gallerykingyo.com/exhibition/2011/1115.html

◉「越後妻有の林間学校2011秋」

10月8日～10日 ワークショップ
詳しくはhttp://www.echigo-tsumari.jp

音楽学科

◉演奏会のお知らせ

○第23回ウィンドオーケストラ定期演奏会
11月22日 練馬文化センター大ホール
○第39回ファカルティコンサート
11月26日 江古田校舎小ホール
○第40回ピアノコンサート
11月28日 練馬文化センター小ホール
○第106回定期演奏会
12月1日 練馬文化センター大ホール
○第42回オペラ公演
12月8日 練馬文化センター小ホール
○第32回新作室内楽の会
12月16日 江古田校舎小ホール
○大学院修了演奏審査会(声楽、ピアノ)
12月17日 江古田校舎小ホール
○大学院修了演奏会／修論要旨発表会
3月15日 練馬文化センター小ホール
○卒業論文要旨発表会
3月21日 江古田校舎小ホール
○卒業演奏会
3月21日 練馬文化センター小ホール

文芸学科

◉稲葉真弓講師が谷崎潤一郎賞受賞

第47回谷崎潤一郎賞(中央公論新社主催)が、稲葉真弓講師の「半島へ」(講談社)に決まりました。授賞式は10月13日、東京・丸の内の東京会館で行われました。

◉コバルト文庫から御永真幸さん第一作刊行

集英社コバルト文庫2010年度ノベル大賞で佳作に選ばれた、文芸学科4年生、ペンネーム：御永真幸(みながまさゆき)さんのデビュー第一作『無音の哀戀歌 ～さようなら、わたしの最愛～』が7月30日に集英社コバルト文庫から発刊されました。在学中にデビューした新たな若き書き手の今後が期待されます。

◉「伊藤園お～いお茶新俳句大賞」に入賞

「第22回伊藤園お～いお茶新俳句大賞」には、1,712,928句の応募があり、その中から佳作特別賞に3名の文芸学科生の作品が選ばれました。

青梅や祖母は縁側より見たる	池田真那美(4年)
花冷えて不意に予定が空きにけり	小林美織(卒業生)
六両の電車は走る眠る町	藤森晴香(4年)

演劇学科

芸術の秋の深まりとともに日芸演劇学科の実習発表や卒業制作はファイナル・ステージに向かって、ますます稽古に熱が入っています。
公演日程は下記のとおりです。ぜひ、お見逃しなく！
○舞台総合実習IVD【洋舞】
『MODERN DANCE PERFORMANCE』
創舞指導：松永雅彦
11月11日・12日 江古田校舎北棟中ホール
○卒業制作【演劇】『踏ん切って 今―「人形の家」より―』
作：ヘンリック・イプセン、訳：毛利三彌、学生演出
11月16日～20日 江古田校舎北棟小ホール
○舞台総合実習IVA【演劇】『ニッポン・ウォーズ』
作・演出：川村 毅
11月25日～27日 江古田校舎北棟中ホール
○舞台総合実習IIC【日舞】
『遠き神よ微笑み給へ―竜神村に伝わる伝説より―』
創舞指導：藤間恵都子
12月3日 所沢校舎写真・映画・演劇・放送棟実習室1
○卒業制作【演劇】『OUR TOWN―わが町より―』
作：ソーントン・ワイルダー、学生演出
12月9日～11日 江古田校舎北棟中ホール
○舞台総合実習IIA【演劇】『春のめざめ』
作：フランク・ヴェデキント 演出：桐山知也
12月15日～17日 所沢校舎写真・映画・演劇・放送棟実習室1
○卒業制作【洋舞】
『MODERN DANCE PERFORMANCE』
創舞指導：加藤みや子
12月16日・17日 江古田校舎北棟中ホール
○卒業制作【日舞】『カラフル』
創舞指導：花柳昌太朗
12月23日・24日 江古田校舎北棟中ホール
詳しくは学科ホームページをご覧ください。
http://www.art.nihon-u.ac.jp/theatre

放送学科

◉「テレビメディアについて考える」講演会開催

練馬区教育委員会主催、放送学科共催の情報教育推進事業として、6月25日から7月30日まで、鈴木康弘教授指導のもと、情報番組制作ワークショップが実施されました。対象は練馬区在住、在学の中学生で、区内における取材から本学スタジオでの収録までを行い、「練馬区から元気の素を発信する」という目的の情報番組を制作しました。
そして8月5日には、制作した番組の上映と併せて、鈴木教授を講師に「テレビメディアについて考える～番組制作をとおして学ぶこと～」と題した講演会が開催されました。これには、ワークショップに参加した中学生とその関係者をはじめ、一般の練馬区民の方々も出席。番組制作をとおして社会に目を向けることと、情報リテラシーを身につけることの大切さが熱く語られ、ワークショップの締め括りとなりました。

◉公開講座「テレビ報道に問われること～大震災・原発事故とテレビ～」

東日本大震災と福島第一原発事故を契機に改めて問われているテレビ報道のあり方について、異なる角度から全3回にわたって検証する公開講座が実施されました。
「伝える側が背負うもの～東日本大震災とテレビ～」(講師＝高村 裕・芸術学部講師、6月29日)では、震災のニュース・ドキュメンタリーを被災者がどう受け止めていたのかに着目し、テレビというメディアがこの大災害に対して背負うものを考察しました。
「記者たちの眼差し～"停波"の危機と向き合いながら～」(講師＝岩城浩幸・芸術学部講師、7月6日)では、電力・燃料の不足や放射能の危険に直面しながら被災地取材にあたった記者たちの、生身の心の軌跡が報告されました。
そして、「ソーシャルメディアとテレビ報道」(講師＝兼高聖雄教授、7月13日)では、既存メディアの雄であるテレビがその力を発揮できたのか、また新たなコミュニケーションネットワークはどんな役割を果たしたのかを検証し、新旧メディアの未来を見据えました。

デザイン学科

◉石田純之助専任講師が個展「素材から形へ」を開催

石田純之助専任講師の個展が9月28日から10月15日まで江古田校舎A&Dギャラリーで開催され、杉材の軸組による椅子のデザインと制作過程の紹介に加え、EVエコランカーは実車とその原型や雌型、スケッチなどが展示されました。

◉デザイン学科の卒業生が「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2011」に入選

デザイン系大学の卒業制作を対象とした標記コンテストの審査結果が10月5日に公表され、応募総数296作品の中から14作品が入選する中、高森奈央子さん(CDコースH22年度卒)の作品『LIVE』が河原敏文賞(審査員賞)を受賞しました。

◉「徳島すぎ」の間伐材の有効利用を進める産学プロジェクトの成果を実物展示

徳島県産「徳島すぎ」の間伐材を利用して商品化に取り組む産学プロジェクトで制作した学生作品の東屋「縁 -enishi-」が徳島県吉野川市にある吉野川市山川アメニティセンターに屋外展示されました。同作品は市橋正崇さん(ADコース4年)が設計、市橋さんとともに同コース4年の中川照博さん、野々瀬 響さん、萩尾衛俊さん、3年のジョンジへさんが実寸で制作したものです。今後は吉野川市民の憩いの場として常設される予定です。
なお、この取り組みが9月14日に四国放送のニュース番組「フォーカス徳島」で紹介され、地域振興に貢献するものと期待されています。

◉フィリップ・ハイトゥカンプ氏と細谷 誠専任講師によるワークショップを開催

平成23年度日本大学海外学術交流事業の一環で、ドイツ／ケルン工科大学人文科学部インターナショナル・スクール・オブ・デザインのフィリップ・ハイトゥカンプ教授を海外客員教授として招聘し、10月24日から27日まで江古田校舎にてインターフェイスデザインに関するワークショップを行いました。また、11月1日から12日までは細谷 誠専任講師がケルンに渡り、同校でインタラクションデザインに関するワークショップを開催し学術交流を行います。

◉「プロと卵のエコデザイン展2011」開催

プロの工業デザイナーとデザイナーの卵達(学生)が協働するデザイン展が下記の要領で開催されます。今年も佐藤 徹准教授、石田純之助専任講師、そしてインダストリアルデザインコースの学生選抜が参加し、様々なエコデザインプロダクトを展示します。21世紀の新たなデザインの可能性をご覧ください。
会期：12月1日～13日、10:30-19:00、水曜定休、入場無料
会場：新宿パークタワー内リビングデザインセンターOZONE 3階、オゾンプラザ

College Administration Office

【事務局からのお知らせ】

◉平成23年度授業日程

学部祭準備	11月2日(水)(休講)
芸術学部祭	11月3日(木)～5日(土)於：江古田校舎(4、5日は休講)
学部祭後片付け	11月6日(日)
一般推薦・外国人留学生等入試	11月17日(木)(休講)
芸術学部創設90周年記念式典	11月19日(土)(休講)
付属推薦入試、編入学・転部試験	12月13日(火)(休講)
後期前半授業終了	12月15日(木)
卒業試験、後期補講期間	12月16日(金)～22日(木)

※補講の実施を必要としない科目については、休講とする。

冬期休暇	12月24日(土)～平成24年1月7日(土)
後期後半授業開始	平成24年1月10日(火)
卒論・卒制提出手続	1月12日(木)13日(金)
学年末A試験(含、後期試験及び卒業追・再試験)	1月23日(月)～28日(土)

※試験を実施しない科目、B試験該当科目は平常通り授業を行う。

学年末B試験(含、後期試験及び卒業追・再試験)	1月30日(月)～2月4日(土)

※所定の試験時間割にて試験を実施し、平常授業は行わない。

学年末休暇	2月6日(月)～
平成23年度卒業式	3月25日(日)(全日大)於：日本武道館
芸術学部学位記授与式	3月25日(日) 午後 於：江古田校舎

◉芸術資料館企画展開催日程

オリジナルプリント展「THE FAR EAST―極東の島国より―我が国新聞写真の起源」
10月25日(火)～11月11日(金)
(11月2日(水)～6日(日)の学部祭期間【含準備・後片付】も開館)
(財)北野生涯教育振興会彫刻奨学金受賞者展 11月14日(月)～25日(金)
(11月17日(木)は一般推薦・外国人留学生等入試のため休館)
コミュニケーションデザイン展 11月29日(火)～12月21日(水)
(12月13日(火)は付属推薦入試、編入学・転部試験のため休館)
美術学科卒業制作展 平成24年1月11日(水)～25日(水)
大学院芸術学研究科造形芸術専攻修了制作展 1月27日(金)～2月3日(金)
写真学科2012卒業制作展 2月17日(金)～3月3日(土)

◉平成24年度一般入学試験日程

【第1期】(募集人員376名)

学科(募集人員)	出願期間	試験日	合格発表
写真(43)	1月8日～31日	2月7・8日	2月16日
美術(30)		2月7・8日	
音楽(45)		2月7～9日	
放送(54)		〈一次〉2月7日 〈*二次〉2月10日	
デザイン(40)		2月7・8日	
映画(64)	1月8日～2月7日	2月14・15日	2月23日
文芸(60)		2月14日	
演劇(40)		2月14・15日	

*放送学科の二次試験は一次試験合格者(発表日＝2月9日)のみ実施

【第2期】(募集人員58名)

学科(募集人員)	出願期間	試験日	合格発表
写真(5)	1月8日～2月28日	3月6・7日	3月15日
映画(10)		3月6・7日	
美術(5)		3月6・7日	
音楽(6)		3月6・7日	
文芸(10)		3月6日	
演劇(7)		3月6・7日	
放送(12)		〈一次〉3月6日 〈*二次〉3月9日	
デザイン(3)		3月6日	

*放送学科の二次試験は一次試験合格者(発表日＝3月8日)のみ実施

※期日はすべて平成24年、試験場は江古田校舎とする
※各出願締切日前日及び当日のみ、日本大学入試センターにて窓口出願受付を行う
※各出願締切日当日及び翌日のみ、芸術学部江古田校舎にて窓口出願受付を行う

編集後記

「脱皮する家」でワークショップを行った。東北の被災地の子供たちを含めて約70名。内容は下駄を彫る。作品に入って、五感で感じ、その感触を彫って持ち帰るというもの。作品の体験といつまでも忘れない感触。天気が良いので外にゴザを敷いて行った。一見農作業のようだが、実に不思議な光景。彫刻刀を使うのは久しぶりと言って苦戦する大人たちと無心に彫る子供たち、短い時間であってもみんなで和気藹々。楽しい時間が過ごせたようで、「また来たい。」とそのまま履いて帰って行く。アート作品がよりどころになるなんて、まさに作家冥利に尽きる。
さて、未曾有や想定外という言葉を聞いて久しい。新潟での制作に関わり始めて、8年目を迎える。その間この地域は、2度の水害と3度の地震に見舞われている。ほとんどが専業農家で自然を相手にしている人々にとっては、未曾有や想定外はまさに死活問題である。それでも元気に笑っている。「震災慣れしちゃって」ということばの裏には前に進む力を感じる。少なくとも私は、現地で制作をしながら、いろいろなことを学んだ。そしてこれからも。気がつけば3軒目の空き家を改装中である。

編集委員 鞍掛純一

◉発行：日本大学芸術学部 ◉発行責任者：野田慶人
◉編集：広報委員会／委員長：佐藤洋二郎／副委員長：中町綾子／編集委員：浅井 譲／宮崎正弘／鞍掛純一／土野研治／青木敬士／丸茂祐佳／金 龍郎／長瀬浩明／松本 洸／ジュリアン・マニング／松村悦博／樋口 肇／秋山和則／鈴木俊崇 ◉ACロゴデザイン：中島安貴輝 ◉デザイン：井原靖章デザイン ◉印刷：(株)タスプ／箭内民生 発行2011.11